

(金のエンジェル賞 中学生の部)

瞳ちゃんの秘密

中二・長谷部 百花

「瞳、宿題やったの？」

「今からやる。」

そうやって私は漢字プリントを机に出し、『河合 瞳』とプリントに名前を書いた。

『皿』、『笛』、『ハコ』…。あれ？ハコってどうやって書くんだっけ？こんな感じだったかな？」

そう言いながら、手のひらに『箱』という文字を書いてみた。すると、今書いたはずの『箱』という文字がスーッと消えた。

「え!？」

と思わずすつとんきょうな声を上げた。それから、ふと机の上に目をやると、一つの箱があることに気付いた。

「え？何この箱。こんなのあったっけ!？」

一瞬思考が停止した。が、我に返った私は、頭が混乱した。

（何が入ってるのかな？開けてみようかな？でも、虫とか出てきたらいやだなあ。怖いけど、やっぱり気になる…。ていうか、そもそもなんで箱が突然現れたの？うーん…。）

「えーい。もうこうなったら、開けてみるしかない。」

そして、ふたを開けようと箱に手をかけると、シュルルルルル…。

「えっ？」

机の上にあつた箱がみるみると私の手の中に消えていった。箱に触れた左手を見ると、私が書いた『箱』という文字が何事もなかったように、手のひらに戻っていた。

「今の何？夢？」

私は怖くなって、今のはなかったことにしようとした。その時、
「ごはんよー。手を洗って。」

下からお母さんの声が聞こえた。

「はい。」

手を洗うと文字は消えた。とりあえず、今起きたことはお母さんには秘密にしておこう。

次の日。やっぱり気になって、昨日の出来事をもう一度試してみることにした。まず左の手のひらに『バナナ』と書いてみた。すると、昨日と同じように、『バナナ』という文字はスーッと消え、それと同時に机の上にバナナが現れた。私は食べてみようと、左手でバナナをつかんだ。その瞬間、
シュルルルルルル…。

バナナは手の中に消えた。そしてその左の手のひらを見ると、『バナナ』という文字は戻っていた。

次は、『りんご』で試してみることにした。やっぱりまた、机の前にりんごが現れた。今度はりんごを右手でつかんでみた。すると、不思議なことになりんごは消えなかった。

（なんで消えないんだらう。もしかして、文字を書いた方の手でつかむと消えちゃうのかも。）

そう思いながら、右手に持っているりんごを無意識にかじっていた。

「あ……。美味しい。」

次の日。

「瞳く。ちよつとしようゆ買ってきてく。」

「はくい。」

私は、お母さんにおつかいを頼まれ近くのスーパーまで出かけた。家を出てしばらく歩いていると、木の下で小さな女の子が泣いていた。

「どうかしたの？」

と声をかけると、

「風船が木に引っかかっちゃったの。」

と女の子は泣きながら、木の上を指さした。見上げると木の枝には赤い風船が引っかかっていた。

「うーん。あそこじゃ高すぎてとれないな。」

そこで私は、女の子に背を向けて左手に『赤い風船』と書いて、出てきた風船を女の子に渡した。女の子は嬉しそうに、

「お姉ちゃん。ありがとう！」

と言って走って行った。私はなんだか得意げになった。

スーパーへ行くため、公園を通り抜けようと中へ入ると、男の子がキョロキョロと必死で何かを探していた。

「何探してるの？」

と声をかけてみると、男の子は

「ライオンのぬいぐるみがなくなっちゃったの。」

と言った。そこで私はポケットからペンを取り出し、左手に『ライオン：』と書いたその瞬間、手の中の文字が消え、目の前に本物の

ライオンが現れた。

「しまった！」

私はとっさに男の子の手を引き、走った。公園から出たところで後ろを振り返ると、ライオンはいなくなっていた。公園を出て、ほっとした男の子は「怖いよう」と言って泣き出した。

「もう大丈夫だよ。」

そう言ったものの、私は不安だった。だってライオンは、消えたわけじゃない……。このままじゃ街が大変な事になっちゃう！なんとかしなきゃ……。とりあえず、私は男の子を家まで送り届けた。それから、ライオンを探しに公園に戻ろうとした。その時、後ろから誰かの悲鳴が聞こえた。振り返ってみると、たくさんの人がこっちに向かって走ってくる。よく見ると、その後ろをライオンが追いかけている。私は急いで、近くの塀に身をひそめた。ライオンが塀の前を通り過ぎていく。

（どうしよう。私のせいでみんなが食べられちゃう。なんとしてでもライオンをこの左手に戻さなきゃ！）

私はライオンを追いかけて全速力で走った。体育の時間の50メートル走でさえ、こんなに頑張ったことはない。頑張れ！私！頑張れ！瞳！あと少し。あと少し……。必死に左手をのばした。すると、左手の指先がライオンのしっぽにふれた。そして：

「えいっ！」

と左手を目いっぱい伸ばして、ライオンのしっぽをつかんだ！

シユルルルルルル……。

ライオンは手の中に消えた。手のひらを見ると、『ライオン』という文字が戻っていた。

「はあく良かった。」

私は急いで公園に戻り、手を洗った。ライオンという文字は左手から跡形もなく消えた。

「これでもう大丈夫！」

私はホッとしてそばにあったベンチに座った。そして、大きなため息とともにつぶやいた。

「男の子に悪いことしちゃった。ぬいぐるみが見つからなかった上に怖がらせちゃって……。そうだ！ライオンのぬいぐるみを探して届けてあげよう。」

私はベンチから立ち上がり、ライオンのぬいぐるみを探し始めた。

「あった！」

私はライオンのぬいぐるみについていた砂をはらい、男の子の家へ向かった。

男の子の家に着きインターホンを鳴らした。

ガチャ

お母さんと一緒にさっきの男の子が出てきた。

「はい。ぬいぐるみ！」

と言いながら、ぬいぐるみを渡した。

「ありがとうございます！お姉ちゃん。」

と男の子は嬉しそうに言った。

「どういたしまして。」

そう言っ、私は男の子に手を振り、家をあとにした。これで気持ち楽になった。

「ただいま。」

家に帰ると、こんどはお母さんが何か探していた。

「お母さん何してるの？」

私がたずねると、

「テレビのリモコンがないの。瞳、一緒に探してくれない？」

「うん。いいよ。」

そう言って私は、お母さんがいる場所から離れて、ペンを取り出し、また左手に『リモコン』と書こうとした。だけど、『リモ：』まで書いて、やめた。男の子のことを思い出し、私はペンにふたをした。自分で探すべきだと思った。あちこち探してみると、リモコンはソファーとクッションの間に挟まっていた。

「お母さん、あったよ。」

と言って、渡した。

「ありがとう、瞳。」

私はその言葉が嬉しくて、今日一番の笑顔になった。

「ところで瞳、しょうゆは？」

「あ！忘れてた！」



画：長田結花
